咸臨丸と塩飽

―幕府海軍を支えた塩飽衆

（咸臨丸渡米１５０周年記念講演）

塩飽史談会会長

入江幸一

咸臨丸渡米１５０周年記念事業実行委員会

地区別人名数

地区別人名数		
本島	笠島	７８
	甲生	１６
	泊	９０
	大浦	２３
	福田	２５
	尻浜	４０
	生ノ浜	３３
広島	立石	１６
	江ノ浦	２０
	茂浦	１４
	市井	１２
	青木	１４
	手島	６６
	佐柳島	７
	高見島	７７
	牛島	３７
	沙弥島	９
	瀬居島	２０
	与島	４０
	岩黒島	３
	櫃石島	１０
	計	６５０

塩飽人名組織図

幕府
老中
|
大坂町奉行（東西）
|
島掛与力

塩飽島中
年寄
|
庄屋・年番・組頭
|
人名
（６５０株）

塩飽水夫徴用状況

西紀	年号	干支	月	行先	人数
一八五四	安政元	寅	三	浦賀	三〇
一八五四	〃〃	〃	一二	〃	一五
一八五五	〃二	卯	五	〃	一五
	〃〃	〃	六〃	〃	一三
	〃〃	〃	九	長崎	三〇
	〃〃	〃	一二	浦賀	一五
一八五六	〃三	辰	一	〃	一五
	〃〃	〃	四	品川	七
	〃〃	〃	〃	長崎	一〇
	〃〃	〃	〃	〃	八
	〃〃	〃	〃	昇平丸	一九
	〃〃	〃	〃	品川	七
	〃〃	〃	五	江戸	七
	〃〃	〃	〃	長崎	一〇
	〃〃	〃	七	浦賀	六
	〃〃	〃	七	品川	六
	〃〃	〃	九	長崎	一〇
	〃〃	〃	一二	長崎	三〇
一八五七	〃四	巳	二	長崎	二四
	〃〃	〃	〃	長崎	三〇
	〃〃	〃	三	〃	六
	〃〃	〃	四	〃	三五
	〃〃	〃	〃	江戸	一九
一八五七	安政四	巳	五	観光丸	四
	〃〃	〃	七	品川	六
	〃〃	〃	一一	長崎	一五
	〃〃	〃	一二	〃	一八
	〃〃	〃	一二	—	九五
一八五八	〃五	午	四	品川	七
	〃〃	〃	八	—	
一八五九	〃六	未	三	—	一一五
	〃〃	〃	五	長崎	二四
		（この間不明）			
一八六三	文久三	亥	七	—	二〇
一八六四	元治一	子	六	観光丸	八
一八六五	慶応一	丑	一	黒龍丸	一五
	〃〃	〃	八	〃	一〇
一八六六	〃二	寅	一	朝日丸	九
	〃〃	〃	二	翔鶴	一〇
	〃〃	〃	五	神速丸	四
	〃〃	〃	六	翔鶴	九
	〃〃	〃	一〇	黒龍丸	七
一八六七	〃三	卯	一一	開陽丸	三〇
				計	七七三

注　この数は延べ人員で、同一人が何回も出動している。

文久三年（一八六三）七月以降は、江戸の町人武蔵屋重右衛門を身元引受用達に任じ、伊豆・相模の沿岸から募集することになった。しかし、水夫が不足した軍艦は、直接塩飽へ周旋を依頼し、塩飽もこれに応じて若者を送出している。

咸臨丸関係年表

西暦	年号	月	事項
一八五三	嘉永六	六	米国よりペリーが来航する
一八五四	安政元	三	塩飽水夫三〇人が徴用される（浦賀行）
		五	浦賀にて鳳凰丸が完成する
一八五五	二	八	オランダ国王が幕府に観光丸を贈呈する
		七	海軍伝習所が長崎に開設される
		九	塩飽水夫三〇人が徴用される（長崎行）
一八五七	四	四	江戸築地に軍艦教授所が開設される
		九	オランダから咸臨丸が到着する
一八五八	五	五	オランダから朝陽丸が到着する
	〃		広島立石の庄屋沢蔵と本島笠島の年番五郎兵衛が水夫賃金につき島中難渋の次第を大坂奉行に上訴する
		六	日米修好通商条約が調印される
一八五九	六	五	長崎海軍伝習所が閉鎖され江戸の軍艦教授所に合併される
一八六〇	万延元	一	日米修好通商条約の批准書交換のため使節団が米艦ポーハタン号に乗り品川を出帆する
	〃		随行艦咸臨丸が浦賀を出帆する、塩飽水夫三五人が乗り組む
		二	咸臨丸がサンフランシスコに入港する
		三	広島青木出身源之助（二五歳）が死去する
	〃		佐柳島出身富蔵（二七歳）が死去する

一八六〇	万延元	三	ポーハタン号がサンフランシスコに入港する
		〃	咸臨丸がサンフランシスコを出港し帰国の途につく
		四	咸臨丸がハワイホノルルに寄港する
		五	咸臨丸が浦賀に到着する
一八六一	文久元	一	咸臨丸が小笠原移民を乗せて航海する
一八六二		二	オランダ留学生の古川庄八（瀬居島出身）、山下岩吉（高見島出身）らを乗せた咸臨丸が本島に寄港する
一八六三		三	幕府が江戸の町人武蔵屋重右衛門を水夫の身元引受用達とする
一八六六	慶応二		咸臨丸が機関を取り外し帆船となる
一八六八	明治元	九	榎本武揚に従い江戸を出港したが荒天のため清水港に漂着し官軍に拿捕される
一八六九		二	咸臨丸が北海道開拓使の御用船となる
一八七一		四	咸臨丸が民間会社の所有となる
		七	咸臨丸が北海道更木岬木古内沖で暗礁に乗り上げ破損沈没する
		九	

最近になって、万延元年に渡米した咸臨丸に、なぜ塩飽の水夫が３５人も乗っていたのかとの質問を受けることが多くなりました。それについて塩飽の歴史を簡単に説明しますと、塩飽は、瀬戸内海のほぼ中央部にあって、本州と四国が最も接近した備讃瀬戸に２８の島々が点在し、複雑にはげしく流れる潮に培われた操船技術に巧みな人達がいて、古くから海運業が盛んでした。
一方で日本の政権を握った人達、特に中世において天下人と呼ばれた織田信長・豊臣秀吉・徳川家康は、塩飽を自分の水軍基地とし、利権を与えてその海運力を利用しました。

塩飽水軍は西の村上水軍と異なって、武器を持って戦う武装集団ではなく、船をもって将兵や兵糧を運送するのが本分です。秀吉は天下統一に至る戦いに功績のあった塩飽の船方（ふなかた）６５０人にその領地１２５０石を与える旨の朱印状を発行し、家康もまた関が原の戦いの直後に引き続きその特権を認め塩飽衆を幕府の御用船方に任じました。
塩飽ではこの６５０人を人名（にんみょう）と呼び、その組織を島中（とうちゅう）といいます。
塩飽は幕府の支配を受けながら、年寄を頂点とした特異な自治制をとって運用されました。本日は幕末における海軍の創設と水夫の徴用についてお話ししたいので、塩飽の人名制については省略しますが、御用船方となった塩飽衆は、東北地方でとれた城米（幕府の年貢米）を日本海を通って大坂へ運搬する西回り廻船として活躍し、江戸中期には船数４００船水主３,４００人という海運王国を築きますが、享保期における幕府の廻米制度の改正によって、城米輸送の特権を失い次第に衰微して咸臨丸が渡米した万延期頃には、大型船の船持が僅か１２人という衰退ぶりで島中の財政も窮乏し、赤字を張銀（臨時課金）や借入金で補充をするようになります。

当時、西欧諸国は蒸気船の発明により、遠洋航海が可能になり、世界を植民地化しようと、東洋にまでその手が伸びて来るようになりました。幕府は友好国であるオランダの忠告をいれて開国し、アメリカと友好通商条約を結びました。大船建造の禁令を解き洋式軍艦鳳凰丸を浦賀で建造し、乗組水夫として塩飽から３０人を徴用したのが、水夫徴用の最初です。これは御用船方の実績と優秀な操船技術に定評があったためです。幕府の徴用通達を受けた年寄の質問に対し、笠島・泊の年番は連名で、

元来塩飽島の儀は、御軍艦御手当の水主と申す御趣意にて、諸役御免御せ付けられ、全て作り取りの土地に住居仕り、冥加至極の有り難き御国恩頂戴奉り候上は何時御用御せ付けられ候共、六百五拾人の分早速に罷り出申す筈と、かねて一同相心得罷り在り候（後略）」と答申しています。

これは浦役人の素直な心情であろうが後にアメリカまで行くことになろうとは

夢にもおもわなかったことでしょう。

塩飽島中では、早速各浦の年番・庄屋・組頭を招集した島中会合を開き、協議を行った結果、通達の通り水夫を差し出すことを決定し、次のことを議決しました。

一　３０人の水夫は、最初のことであるから２１浦より１人ずつ差し出し、残り９人は人名の数に応じて、泊浦より３人、笠島浦、高見島、手島より各２人を出すこと。

一　老若を除き、２０歳より５０歳までの者をその浦々で選定し、２１日までに見極めのため、勤番所へ召し連れること。

一　用命があるまでは１人前１ヶ年分金５両を支給すること。

一　浦賀へ行って御用についた時は、右の５両に足して１人前銀１貫目を支給し、浦賀までの往復に要する費用は、その内から個々に支出すること。

一　幕府から支給される扶持米並びに手当額は本人へ渡すこと。

３０人の水夫は嘉永７年３月２５日に大坂に到着し、３艘の廻船に分乗して浦賀に到着、鳳凰丸に乗り組みました。任期は１年です。

その後幕府は安政２年１０月２２日、長崎に海軍伝習所を開設し、オランダの士官を教師に雇い、勝麟太郎はじめ若い幕臣らに洋式海軍の伝習が開始されました。長崎での伝習にはオランダ国王が幕府に贈呈した観光丸と、幕府がオランダから購入した咸臨丸が練習艦に使用され、これを操船する水夫として３０人が徴用されたのが長崎への最初の徴用です。塩飽ではこのため人名６５０人から１人金１歩（約２万５千円）の張銀（はりぎん）を取り立て、その内から水夫１人前金５両（約５０万円）の年俸と、長崎までの船賃総額１２両（約１２０万円）を支払っています。

水夫が島を出発するときは、必ず門出（壮行会）を行い年寄が激励と訓告を行って送り出しました。

別紙の塩飽水夫徴用状況は、笠島の年番を勤めた藤井治八が島中会計の帳本を勤めた際の覚帳等から抽出したものですが、水夫の徴用に塩飽がいかに大きな犠牲を払ったかがお分かりいただけるかと思います。

幕府はその後朝陽丸、開陽丸等多くの軍艦を購入し海軍の体制が調いますが、塩飽の水夫はそれらの軍艦に分乗し、幕府海軍の創設を支えていくことになります。

安政年間の張銀（はりぎん）の徴収

安政二年九月	金一歩	約二五千円
〃 一二	銀二〇目	一八
三 四	〃二〇目	一八
四 五	〃一八匁	一五
〃 七	〃一七匁五分	一五
〃 八	金一歩	一五
〃 一二	銀一七匁五分	一五
五 七	〃一四匁	一〇
〃 一一	〃一四匁	一〇
六 五	〃一一匁	一五

当時塩飽では日雇人夫が一日銀三匁である

金四歩＝一両（約十万円）

銀七〇目（匁）＝一両（当時）

門出（かどで）の宴の料理

（安政四年八月十七日　長崎行の例）

参加者

年寄衆、浦役人（年番・庄屋・組頭）十九人、勤番所職員四人

水夫三〇人　計五三人

大鉢

ちぬの刺身

たこ

紅粉しょうが

盛込

玉子厚焼

れんこん

かまぼこ

いも

大鉢

魚めん

どんぶり

なます（大根・ちぬ身）

同　骨いり付

外にしたし

酒